ば、道元和尚の歌に、

世の中はなにゝたとへん水鳥のはしふる露にやどるつきかげ、かくのごとく、はしふる露の其微塵の如きまでも、ことゞく月かげのうつるごとく、理は見えずといへども、裏に具るをしらるべし、我性を覺悟して見れば、神らしき物もなく、大極やまた佛らしきものもなし、よつて此性を會得すれば、儒、老、莊、佛、百家、衆技といへども、皆我神國の末社にあらずといふ事なし、或書に曰く、日本一面の神國といへば、廣して狹し、微塵の中にも神國ありといはゞ、狹して廣し、行藤氏しかりとてかのうたをしるす、

〔類聚名義抄六心〕意。於記反　コヽロ

〔日本書紀一神代〕於是陰陽始遘合爲夫婦、及至產時、先以淡路洲爲胞、意所不快、○下略

〔聖教要錄下〕意情

意者、性々發動、未及有迹之名也、既有迹、乃曰情、發動之機微、是意也、心之所嚮也、性心者體、而意情者用也、

〔訓幼字義七〕意　凡十則

意とは、意志とつゞきて、心の內にたくわへおもふことなり、物ごととりつをきつ思案をし、又おもひやりすいすやうする皆意なり、先儒心の發也と註せらるゝはあたらず、然ればこゝろばせと訓ずるも、字義に叶はざることしるべし、

〔辨名下〕心志意九則

意者謂起念也、人之不可無者也、雖聖人亦爾、如子絕四毋意、本以孔子行禮言之、孔子之心、與禮一矣、故當其行禮、若全不經意、然是形容其動容周旋中禮者爾、後儒不識語意所在、或謂無私意、或謂聖人盛德之至、自無往來計較之心也、皆泥矣、如大學誠意、乃以好惡言之、意之誠、格物之功効也、朱註以來、